



枕慈童（一名 菊慈童）

ワキ次第
山より山の奥までも。――道あるや時代なるらん。

ワキ
是は魏の文帝に仕へ奉る臣下なり。さても我君の宣旨には、
酈懸山の麓より藥の水 涌き出でたり。其水上を見て 参れ
との宣旨を蒙り、唯今山路に赴き候。

急ぎ候ふ程に、是は早酈懸山に着きて候。是に菴の見えて候。
まづ此あたりに徘徊し、事の子細をうかがはばやと存じ候。

シテサン
それ邯鄲の枕の夢、樂しむ事 百年、慈童が枕は古への、
思ひ寐なれば目もあはず。

夢もなし、いつ樂しみを松が根の、――嵐の床に假寐して、
枕の夢は夜もすがら、身を知る袖は乾されず。
頼めにし、かひこそなければ獨寐の、枕言葉ぞ恨みなる、――。

ワキ詞
不思議やな 此山中ハ、虎狼野干のすみかなるに、
是なる菴の内よりも、顯はれ出づる姿を見れば、
其様化したる人間なり。如何なる者ぞ 名をなれ。

シテ詞
人倫 通はぬ所ならば、其方をこそ化生の者とは申すべけれ。
是は周の穆王に召し仕はれし、慈童がなれる果ぞとよ。

ワキ
是は不思議の言事かな。誠にからず周の代は、既に数代の
そのかみにて、王位も其数移り來ぬ。

シテ
不思議や我は其のまゝにて、昨日や今日と思ひしに、次第に變は
る其昔とは。さて穆王の位は如何に。

今 魏の文帝の前後の間、七百年に及びたり。
非想非々想は知らず、人間に於いて今まで生ける者あらじ。
いかさま化生の者やらんと、身の怪しめぞ為しにける。

シテ
いや猶も其方をこそ化生の者とは申すべけれ。
忝なくも帝の御枕に、二句の偈を書き添え賜はりたり。

ワキ
是は不思議の事なりと、各立ち寄り讀みて見れば、

シテ
枕の妙文 疑ひなく、
二入

具一切功德慈眼視衆生、
福壽海無量是故應頂禮。

地
此妙文を菊の葉に、置く 滴りや露の身の、不老不死の藥と
なつて、七百歳を送りぬる。
汲む人も汲まざるも、延ぶるや千年なるらん。

地

すなはち此文 菊の葉に、―― 悉く顯はる さればにや。寧も
芳しく 滴りも匂ひ、淵ともなるや谷陰の水の、所は酈縣の、
山のしたがり菊水の流れ。泉はもとより酒なれば、酌みては勤め
すくひては施し、我身も飲むなり 飲むなりや。月は宵の間 其身

も酔ひひに、引かれてよろ――と。たゞよひ寄りて、枕
を取り上げ 戴き奉り、實にも有難き君の聖徳と、岩根の菊を、
手折り伏せ、手折り伏せ、数妙の袖枕、花を筵に臥したりけり。

シテ
もとより藥の酒なれば、

地
もとより藥の酒なれば、酔ひにも侵されず其身も變はらぬ。
七百歳を保らぬるも、此御枕の故なれば、

如何にも久しき千秋の帝 萬歳の我君と、
祈る慈童が七百歳を、我君に授け置き、
盡させじや 盡させじやと、
菊かき分けて山路の仙家に、そのまゝ、慈童は入りにけり。



補注

本文は、全漢字にルビが付けられているが、極力、原典のルビを残した。
旧ルビで誤音になる怖れのある箇所は、現代のルビに替えた。
句読点は、文脈により「」と「。」を区別して改めた。
（頭注記述）

ワキ 官人
シテ 慈童
地は 唐土
季は 九月

邯鄲の枕の夢
蜀の盧生と云ひし人、粟飯一炊の間に榮花■■■の夢を見し古事。
第三輯の「邯鄲」を見るべし。

地にしへの思ひ寐
むかしの罪科を悔い思ひつゝ、寐るの意。
いつ樂しみを
せめて愛を忘るべきを、寐られずして夢も見ざれば、いつの樂し
みをか「待つ」べきといふを、「松」が根に言ひ掛く。

身を知る袖
身の罪を思ひ知る涙の袖にかゝるを云ふ。古今集戀の部に、在原
業平「かず／＼に思い思はず問ひがたみ、身を知る袖は降りぞま
れる」とあるより來る。

頼めにし

穆王の慈童に、行末までも寵愛せんなど約し給ひしを云う。
獨寐の
獨り捨てられて山中に寐るを云ふ。

枕言葉
常に口くせに言う言語。穆王の日夜慈童に頼めたる約束の言葉
を云う。それが空しくなりたる故うらめしと云へるなり。

野千Ⅱ 狐の異名
非想非々想
非想天および非々想天とて佛法に説く天上界の種類。

二句の偈
偈は佛徳讃美の詩。
具一切功德云々
法華經の文句。佛は一切の功德を具へ、慈悲の眼もて衆生を視、

福壽は海の如く量りなし。この故に頂禮して尊び仕ふべしとの意。
淵ともなるや
拾遺集 秋の部に、清原元輔、「我宿の 菊の白露 今日毎に 幾世
つもりて 淵となるらん」とあるより來る。したりの落ちつもり
て淵となるを云ふなり。

其身も酔ひに

「甯」と「ゑひ」と近き音を重ねて用ふ。
岩根の菊を
聖徳と「言ふ」を「いは」根に言い掛く。

数妙の
「袖」にも「枕」にもかゝる枕詞。花を手折り伏せて「敷く」と
言ひ掛く。
花を筵に
菊の花を數物にして其上に臥すととなり、慈童が身に得たる七百歳
の壽命を、帝に譲り奉るとなり。

出典 謡曲評釈 五輯 大和田建樹 著
東京 博文館蔵版 明治四十一年二月十日発行

右、出典より本題部を抜粋して書写
今和四年十月三日
大中臣正比呂

